編集月旦　2014年7月号

★内閣府主催による「高齢社会フォーラムｉｎ東京」７月２９日（火）イイノ・カンファレンス・センターに参加してきました。ことしも基調講演は樋口恵子、堀田力両氏で変わりませんでしたが、分科会が「地域社会活動の活性化」「多世代からみたシニアの意識改革」「シニアと多世代がつながるために」となって、「全員参加型社会を目指して～多世代が経験を分かち合う～」へと一歩踏み出したようです。

☆分科会は「多世代からみたシニアの意識改革」（松田智生コーディネーター）に出てみました。若いパネリストから、いろいろなシニアが紹介されました。「嫌われシニア」「愛されシニア」「孤独なシニア」「アクティブ・シニア」「プラチナ・シニア」「良いシニア」「困ったシニア」「悪ガキ・シニア」などです。「嫌われ・困ったシニア」というのは、差別する、空気が読めない、自分のことばかりいう。「愛され・良いシニア」というのは、いさぎよい、自他がわかる、甘えさせてくれるなど。「悪ガキ・シニア」は評判がよかったです。

★これまで本誌としては、「高齢社会期」（高齢化率１４～２１％時代・１９９４～２００７年）での高齢社会対策を期待し遅延に警鐘を鳴らしてきました。超高齢社会（高齢化率２１％～）は全員参加型社会に入るため「長寿社会」と呼んできました。これから１０年余の遅延をどうやって補っていくのかは内閣府・学者の取組みにかかっています。政治の側からは遅延の反省どころか「高齢社会」の構想すら聞こえてきません。

☆上記フォーラムから堀田力講演を起こしてあります。ここで堀田さんは「共生の文化」を提言しています。来年から「高齢者」「子ども」「障害者」「認知症者」「生活困窮者（引きこもり・ニートも）という５つの政策が期せずして「地域の力」に支援を求めるところとなりました。とくに「支えられる高齢者」に対しては財政難のなかで最善の見直しを「支える側の高齢者」の参加によって推進しようとしています。地域に関心を示さず自分と家族のためだけに一生を過ごすことが「恥ずかしい」と感じる風習を、堀田さんは「共生の文化」と呼んでいます。

★わが国は「人生９０年時代」（「高齢社会対策大綱」から）を迎えているというのに、高齢者の多くはなお「人生６５年時代」の個人的余生を生きています。団塊の世代の人びとを合わせて３２００万人に達した高齢者の多くが、意識を改めて自主的に社会参加をしないかぎり、「日本高齢社会」の形成は遅延しつづけ、公助の負担は増えつづけ、財政負担者である現役世代から高齢者の自助が要請されます。

☆「高齢化」はどこの国にも同様の「高齢者社会」をもたらしますが、各国の「高齢社会」は、独自の条件のもとで自立した高齢者の参加によって達成へと向かいます。いま世界の関心は、トップランナーであるわが国の「高齢社会」形成への動きに向けられています。

★住み慣れた地域での高齢者の「医療・介護」を包括的に確保する「地域包括ケアシステム」が充実されることになります。「支えられる高齢者」対象の原勝則・厚労省老健局長の説明と「支える側の高齢者」対象の堀田力・さわやか福祉財団理事長の講演は、同時にそのことを訴えかけています。関連情報として再録してあります。

☆新論考『丈人力のススメ　生々と「人生９０年」を生きる』の「はじめに　熟成への道をたどりながら」を分載しています。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の目標です。（編集人 記）